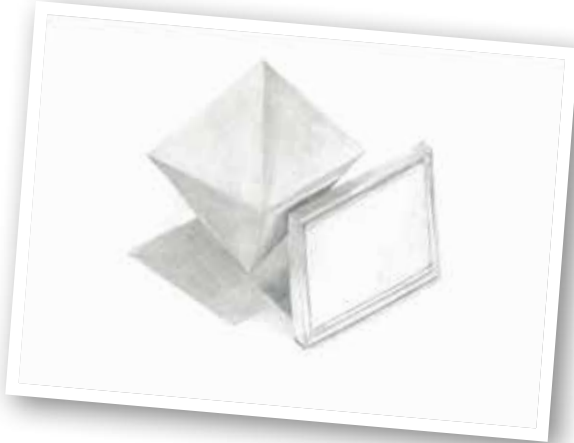


# 図書館だより

Library News No.81

National Institute of Technology (KOSEN) , Nara College

2024年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



表紙画像は、1C 中川 和奏さん(左上)、1M 家藤 幸大さん(右上)  
1I 上山 義史さん(左下)、1C 橋本 梅乃さん(右下)の作品

表紙絵は美術の授業の作品で教員から推薦された中から教育支援センター運営委員会での投票により選出しています。また、図書館だより掲載ページでは候補作も含めすべての作品をご覧になれます。 <https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/publication/librarynews/>



## 目次

巻頭言 .....	2
読書感想文コンクール・個人多読・クラス多読表彰について .....	3
読書感想文コンクールを終えて .....	4
読書感想文入賞作品 .....	6
図書委員会の仕事について .....	10
新蔵書検索サイトの紹介 .....	10
本の魅力について .....	11
おすすめ図書紹介 .....	12



# 巻頭言

DX時代の図書館の役割

校長 近藤科江

小中学生のころは、毎日のように図書館に通い、友達と競うように本を読んでいた。高校になると、読書の時間がずいぶん短くなって、長い休みがないと図書館に行くことも少なくなりました。「学校読書調査」(全国学校図書館協議会)の結果でも、小学生12～13冊/月に対して、中学生4～5冊/月、高校生2冊未満/月の平均読書数という状況で、年齢とともに読書数も減っています。デジタル世代の「読書離れ」が影響しているのでしょうか。

スマートホン保有率(「令和2年通信利用動向調査/世帯構成員編」総務省)は、小学生の45.3%、中高生の93.1%になっており、10代のSNS利用率は93%、YouTube利用率は96%を超えています。近頃は、直感的に理解できる画像や短いフレーズによる情報がスマートホンなどデジタル機器から溢れています。若い世代は、長い文章を読んだり、言葉の意味を深く考えたりする習慣がなくなり、読書の時間がスマートホンに奪われている印象を受けます。しかし、先の調査結果では、読書数はいずれの年代でも緩やかながら増えています。高校生世代で、2冊/月はやや少ない気もしますが、若い世代の読書数が増える傾向にあることは、意外に感じるとともに、何か救われた気がします。

私が研究を始めた当初は、論文を読むために図書館に入り浸っていました。何時間も図書館に籠り、論文を読み、必要な論文を借りてはせっせと研究室に運びコピーするという毎日を送っていました。しかし、電子ジャーナルが普及し始めてから、図書館に通う事も無くなりました。読みたい論文や単行本を見つけたら、目の前のパソコンで検索して、クリック一つですぐに読むことができます。その便利さを一度味わうと、図書館で本を探したり、借りたりすることは無くなりました。最近、紙印刷で発行される学術誌は激減しています。それは単行本や漫画本、新聞に至るまで、紙媒体の情報がデジタル化されている現状と同様です。本が消える未来、ハコモノである図書館が教育機関から無くなる未来は、着実に近づいています。実際、利用者の減少と経費削減の観点から、「図書館不要論」が論じられています。図書館の役割を考える時が来ているのです。

前職では、図書館長を兼務していたこともあり、図書館の役割について考える機会がありました。「図書館が好き」という学生も少なからずおり、図書館サポーターとして活動していました。そんな学生を中心に、図書館の利用率を上げる取り組みを地道に行うなかで、学生はSNSや動画を使ったアピール活動を率先して行っていました。Z世代には、やはりインターネットを介した活動は不可避のようです。一方で、図書館スタッフは、本の整理にあたっていました。蔵書の確認をする傍らで、保管する必要がなくなった本の処分を進めていました。紙でしか発行されていない論文や単行本もPDF化され、デジタル保管されて、どこからでもアクセスできる状態に移行しつつあります。

DX時代の図書館の役割は大きく様変わりし、蔵書保管、図書貸し出しや閲覧はバーチャル空間での業務となります。現実空間としての図書館は、蔵書のスペースが削減され、自習室やオンラインミーティングができる個室が整備されたりして、「過ごしやすさ」や「癒し」を感じる空間として活用され、職場や学び舎における「自分の居場所」「交流する場」としての役割を担うことになるのかもしれませんが。



# 読書感想文コンクール 個人多読・クラス多読表彰について

## 【読書感想文コンクール表彰】

第47回校内読書感想文コンクールの審査結果を発表します。1年生からは204編、2年生からは195編、3年生からは12編、合計441編の応募がありました。教育支援センター運営委員会の教員8名と国語科教員3名による審査・投票の結果、その中から4名の入選作を決定しました。以下にその学生の氏名と作品名を掲げ、栄誉をたたえたいと思います。また、惜しくも入選には至りませんでした。審査の過程で優れた評価を得て、最終選考に残った作品は佳作とし、その学生の氏名も併せてここに紹介します。

### 最優秀賞（2名）

- 1 M 北橋 良隆さん 夜と霧の先にあるもの―「夜と霧」を読んで― 「夜と霧」フランクフル、ヴィクトール・E著  
3 C 原田 綾音さん 他人の幸せと自分の幸せ 「鼻」芥川 龍之介著

### 優秀賞（2名）

- 2 S 斎藤 琢磨さん 本当の「気遣い」に必要なもの 「フラダン」古内 一絵著  
2 S 山口 陽香梨さん 緩やかな滑り台 「ライオンのおやつ」小川 糸著

### 佳作（氏名非公表希望の1名を含む32名）

- |              |              |              |
|--------------|--------------|--------------|
| 1 M 影山 和郷さん  | 1 M 森脇 元輝さん  | 1 M 山本 玲寧さん  |
| 1 E 上林 諒太郎さん | 1 E 野口 一柁さん  | 1 E 平川 結心さん  |
| 1 S 岩崎 史芳さん  | 1 S 竹中 琉生さん  | 1 S 田原 きよらさん |
| 1 I 窪田 夏記さん  | 1 I 三原 瑚桜さん  | 1 C 櫻井 萌夏さん  |
| 1 C 中川 和奏さん  | 1 C 西村 ひかりさん | 1 C 渡邊 周平さん  |
| 2 M 小瀧 結季さん  | 2 M 牧野 ゆいさん  | 2 E 石原 春捺さん  |
| 2 E 芝野 青凧さん  | 2 E 堀井 雄大さん  | 2 I 浦久保 拓人さん |
| 2 I 中谷 唯人さん  | 2 C 岡井 優実さん  | 2 C 久保 陽菜さん  |
| 2 C 當城 優和さん  | 2 C 中田 優翔さん  | 2 C 濱田 明莉さん  |
| 3 M 石田 眞子さん  | 3 M 小原 みなもさん | 3 I 鄭 佳音さん   |
| 3 I 升岡 瑞葉さん  |              |              |

## 読書感想文コンクール表彰式

表彰式は1月5日（金）昼休みに校長室にて行われました。その模様は、図書館からのお知らせに掲載の読書感想文コンクール表彰式ページをご覧ください。



図書館からのお知らせ



（図書館からのお知らせ<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/information/>）



## 【個人多読表彰】

個人多読表彰は、図書館の統計に基づき、貸し出し冊数が多い学生個人を表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰された学生には副賞として、図書カードを贈りました。

- 第1位 物質化学工学科5年 山口 三佳さん
- 第2位 物質化学工学科4年 加納 凜太郎さん
- 第3位 物質化学工学科4年 中南 琢磨さん
- 第4位 電子制御工学科5年 阪本 靖大さん
- 第5位 電気工学科2年 木村 要一さん
- 第6位 物質化学工学科4年 野崎 凌平さん
- 第7位 物質化学工学科1年 岩川 一平さん
- 第8位 情報工学科3年 升岡 瑞葉さん
- 第9位 情報工学科5年 榎本 亮さん
- 第10位 (氏名非公表)



### [クラス多読表彰]

クラス多読表彰は、図書館の統計に基づき、一人当たりの貸し出し冊数の多いクラスを表彰し、これを機に学生が一層図書館を活用することを期待するものです。なお、表彰されたクラスには副賞として、希望図書の購入ができる権利を贈りました。



- 第1位 物質化学工学科4年 (19.0冊/人)
- 第2位 システム創成工学専攻 情報システムコース2年 (13.5冊/人)
- 第3位 システム創成工学専攻 機械制御システムコース1年 (10.4冊/人)
- 第4位 情報工学科5年 (9.2冊/人)
- 第5位 物質化学工学科3年 (8.5冊/人)
- 第6位 電子制御工学科5年 (7.0冊/人)
- 参考：システム創成工学専攻 機械制御システムコース2年 (10.2冊/人) ※
- (※) 専攻科のクラスが上位5位までに3クラス以上入っていた場合、専攻科は上位2クラスに制限し、本科から上位4クラス、合計6クラスとする

全クラスの貸出冊数は「奈良高専図書館 多読表彰ページ」をご参照ください。  
<https://www.nara-k.ac.jp/nnct-library/event/tadoku/>



多読表彰ページ

令和5年度

## 読書感想文コンクールを終えて

### 《最優秀賞について》

1Mの北橋さんは、フランクルの『夜と霧』を取り上げています。本書は第二次世界大戦中のユダヤ人強制収容所で起こった悲劇の記録ですが、北橋さんの感想文が優れているのは、この出来事に対して「かわいそう」「気の毒だ」といった感情に溺れることなく、心理学者である著者の視点の意味を正しく把握した上で、「生きる」とはどういうことかという普遍的な問題意識に踏み込んだ点だと思います。北橋さんの感想には、経験のない者が悲劇の経験者と同じ認識を持つことは不可能だが、生きる意味を捉え直すことが両者の架け橋となり得るのではないかと、という気付きがあります。「生きる」ことの意味について述べられた部分は自己省察であると同時に、グローバルな視野での考察にもなっています。本書のタイトルに関する解釈も説得力がありました。

本書の刊行から七十年以上が経過していますが、今なお混迷を極める世界情勢に対して我々はどう向き合っていけばよいのか、北橋さんの文章はそのことに対する自分なりの考え方を明確に示しています。

3Cの原田さんは、芥川龍之介の『鼻』を取り上げています。作品のテーマを的確に読み取り、言及すべき点を簡潔に示したまとまりの良い文章です。原田さんは、「他人の不幸は蜜の味」という人間の業、それが自分とも



無縁のものではないことを直視するという自省的な視点をまず設定し、幸・不幸は相対的なものであることを指摘します。さらにその感情に対する方策を自分なりに見いだそうとするプロセスが述べられています。口先で綺麗事を唱えたりむやみに大きな目標を掲げたりすることは意外と簡単なことですが、着実に今現在の自分に出来ることは何かを見つめようとする、等身大の筆者の現在がよく分かりました。ところで禅智内供の鼻が元に戻った後、彼は人々からもう笑われずに済んだのでしょうか。原田さんにはその解釈をさらに聞いてみたい気がしました。

#### 《優秀賞について》

2Sの斎藤さんは古内一絵の『フラダン』を取り上げています。斎藤さんは読書を通じて学んだことを三点挙げていますが、そのうち二点は「言葉」というものの重要性に対する考察です。言葉というものは、一旦外に出してしまえば取り消すことはできません。それゆえに自分の思いを言葉にすることには誰にとってもためらいを感じる行為です。しかし敢えてそのハードルを乗り越えることで何か得られるものがあるのではないかという指摘が、登場人物の置かれた背景も視野に入れながら分かりやすく書かれていました。三点目の学びとして「無知の知」ということも挙げられていました。これらの学びはいずれも他者との真摯なコミュニケーションのあり方を考える上で非常に重要なことであり、斎藤さんにとって貴重な読書体験だったのではないかと思います。末尾の酔芙蓉という花の意味づけも良い読み方でした。

2Sの山口さんは小川糸『ライオンのおやつ』を取り上げています。十代の若者にとって死は日常から最も遠い事象でしょう。死は多くの人にとっても恐怖であり、死そのものを実感することは難しくとも、読書という行為を通じて死を前にした人間の視点を追体験し自分なりに咀嚼しようとする山口さんの姿勢が明確に読み取れます。過去の悔やまれる経験を上書して、なかったことにするのではなく、過去を振り返りつつ自身をねぎらうことが大事なのではないかとし、それゆえに主人公の最後の日々を「第二の人生の早送りのようだ」ととらえた感想が印象的でした。生死の境が曖昧になるシーンでは怖さも感じながら主人公の気持ちに自分を重ねるように読み進める態度も小説の読書ならではの体験だったのではないかと思います。

#### 《全体について》

感想文の対象となる作品は特に制限を設けていないため、フィクション・ノンフィクションを問わず様々な分野のタイトルが集まりました。詩に挑戦してくれた学生もいました。こうした機会にこそ普段の読書範囲とは異なる分野の本にも挑戦してほしいと思います。高専ならではの科学ジャンルの本を選んだ学生も多くいましたが、その感想は概ね「新しい発見に目を啓かされた」という傾向に収まり、自分なりの問題意識につなげるようとする姿勢が希薄だったことが残念に思われました。小説を特に推奨するわけではありませんが、小説を読むことは取りも直さず他者と出会うことです。自分の知らない他人の人生や考え方を知り、自己観照的な視点を手に入れることは、小説を読むことでしか得られない体験かもしれません。たとえば今回「人間失格」を選んだ感想文が複数ありましたが、それぞれが異なる視点から登場人物の心情や行動を捉えたもので、同じ感想は二つとありませんでした。それを読んだ自分が他には代えがたい無二の存在だからこそ、様々な読み方が生まれるのだと思います。最初は、その作品や登場人物を好きか嫌いかというシンプルな感想を抱くだけでよいのだと思います。そこから一歩踏み込んで、なぜ好き(嫌い)なのか、何が自分の気持ちに引っかかっているのかを自らに問い直すことが、読書体験の醍醐味といえるのではないのでしょうか。

今回も読書を通じて気付いた「生き方」について述べる感想文が多く寄せられました。生き方というと大仰な響きにも聞こえますが、それは結局のところ平生の自分をふり返る営みです。入選作もやはり生き方に言及したのですが、その文章は平易な表現で身構えずに説明されたものばかりで、決して言葉が上滑りすることはありません。それでいて感じたことがきちんと伝わる文章です。

候補作を絞る過程で、感想文の中で取り上げた問題の質には優劣は付けられません。拮抗している場合は文脈が整っていることを判断材料の一つとしますが、その意味で言いたいことがこちらに伝わらない文章は決して少なくありませんでした。語彙力・表現力は感想文を書くために身につけるものではなく、あらゆる場面でのコミュニケーションに必要なものです。自分の感じたことを適切な日本語で相手にわかりやすく伝える努力を怠らないでほしいと思います。

(国語・新井)

# 読書感想文コンクール入賞作品

## 最優秀賞

「夜と霧」 ヴィクトール・E・フランクル 著

### 夜と霧の先にあるもの — 『夜と霧』 を読んで —

機械工学科1年 北橋 良隆

『夜と霧』この名作を読もうと思った理由は2つあります。1つ目は、2021年に中華人民共和国の新疆ウイグル自治区におけるジェノサイドのニュースに衝撃を受け、80年程前のナチス・ドイツによるユダヤ人などに対するホロコーストについて知っておくべきだと強く感じたからです。2つ目は、担任の先生から『人類の必読書』として勧めて下さったからです。

この本は、心理学者であるヴィクトール・E・フランクル氏がナチス・ドイツの強制収容所に移送させられ、そこで自らの身や周囲の人びとに起こった出来事をありのままに、そして心理学者としてそれらが精神にどのような影響を与えたのかを推察した結果を綴った作品であり、同時に人間の偉大と悲惨を描いた作品でもあります。

この本を読んで特に印象に残ったのは、

生きる意味についての問いを180度転換することだ。わたしたちが生きることからなにを期待するかではなく、むしろひたすら、生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ、ということを知り、絶望している人間に伝えねばならない。

という部分です。この部分から気付かされることが多くありました。この本には『収容所にいたことのない人には、わかってもらうように話すなど、とうてい無理だからだ』と書かれており、実際に経験していない人がいくら想像を巡らせても経験した人のようにはなれないため、経験した人、そうでない人との間に認識のギャップが生じてしまうと思います。しかし、『生きる意味についての問いを180度転換する』ことは、経験した人、そうでない人、どちらも行うことができるものだと思います。よって、そのことが経験した人とそうでない人とを結ぶ橋なのではないかと思いました。

『生きることがわたしたちからなにを期待しているかが問題なのだ』とありますが、私は生きる上で対価を求めるのではなく、生きているということに感謝・感動し、自らが自らの命に試練や褒美を与えるというのが『生きる』ことではないのだろうかと考えました。生きていなければ喜びや悲しみなど、何も感じ取ることはできません。命がいかに尊いものなのかを私達は今一度深く知らなければならぬと思いました。

私は本のタイトルである『夜と霧』について考えました。80年前の凄惨たる大戦を『夜』とするならば、夜明け、大戦の終結の後に待っていたものは、朝鮮戦争、東西冷戦、各地で起こる紛争、そしてウクライナ戦争…。先行きの見えない混沌とした世界、『霧』だった。そしてこの先を『夜』にするか、『霧』のままにするか、霧を晴らして平和な世界にするかを決定するのは、ガス室を発明したのと同時に祈りの言葉を口にする『人間』である。という意味がタイトルに秘められているのではないかと考えました。

今回この本を読んで、私達人間が残酷であり同時に善良な存在であるということを知りました。どの方向に転じるか分からない現在の世界を生きるには、絶望するのではなく、希望を持つということが重要であると感じました。

「鼻」 芥川 龍之介 著

## 他人の幸せと自分の幸せ

物質化学工学科3年 原田 綾音

痛い所を衝かれた。この本を読んで、私はそう思った。

もちろん、だれでも他人の不幸に同情しない者はない。ところがその人がその不幸を、どうにかして切り抜ける事ができると、今度はこっちでなんとなく物足りないような心もちがする。少し誇張して言えば、もう一度その人を、同じ不幸におとし入れてみたいような気にさえなる。

この言葉にドキッとさせられたのは、多分私だけではないだろう。いわゆる、「他人の不幸は蜜の味」とかいう類の感情である。心当たりはあるものの、人として汚い感情であるからと自覚して人前には出さなかった感情を、ストレートに暴かれたような気がして、私は暫く本を読む手を止めてしまった。

普通に考えて、ある人が不幸になったからといって自分が幸せになったわけではない。逆に、ある人が幸せになったからといって、自分が不幸になったわけでもないのだ。それでも何だか、他人の不幸を心のどこかで望み、他人の幸せを素直に喜ぶことができない。こうってしまうのは、人が比べたがりだからだろうと私は思う。人は自分と他人とを比較して、上には上がいることを知って絶望し、下には下がいることを知って安心するのである。だから、自分より幸福度の高い人間を見ると、自分と比較してしまって、自分が不幸であるかのように思えてくる。終いには、その人に対して攻撃的な感情さえ芽生えてきたりもする。逆に、自分より幸福度の低い人間を見ると、自分が幸せであるかのように思えて、現状に満足し始めたりするのである。この事を著者は、「傍観者の利己主義」と表現したが、まさにそのとおりであると思う。

でも、他人の幸せを心から祝福できる瞬間も、少なからずあるのではないかと思う。自分が最高に幸せで満ち足りているときである。このときだけは、他人のどんな幸せも素直に受け入れられる。それは、他人がどんなに幸せであろうと、自らの幸せには敵わないと思えるからであろう。いや、最早他人と比較するのさえ馬鹿らしいという心持ちであるかもしれない。つまり、人間が、人として綺麗な心を持てるようになるためには、最高級に幸せにならないといけないのである。

私は別に、この本を読んで、他人の幸せを心から祝福できる人になろうと思った、なんて書くつもりはない。そういう心の綺麗な人になれるだけの幸せを手にするのは、私にはまだ程遠いことのような気がする。私はただ、この本を読んで、人前に出すことのなかった自らの心の汚い部分を再確認させられた。そして、他人がどんなに幸せであっても、憎むよりも先に「私も幸せだ」と胸を張って言える人間になりたいと思った。「私も幸せだ」とは、最高級の幸せではなく、日常の中にある、小さな幸せを指している。どんなジャンルの幸せでもいい。今日食べたご飯が美味しかった、だとか、いつもより空が綺麗な気がする、だとか、友達とくだらない話で大笑いした、だとか。そういう小さな幸せ一つ一つに目を向けて、たとえ最高に幸せではなくとも、それなりに自分は幸せだと感じられる人になりたい。他人と比べて落ち込むより、その方がよっぽど良いじゃないか。

## 優秀賞

「フラダン」 古内 一絵 著

### 本当の「気遣い」に必要なもの

電子制御工学科 2年 齋藤 琢磨

「あのなあ、人間、お互いになんて考えてっか分かんねんだから、言葉ってもんがあんだよ。せっかく、おめーは意見があんのに、それをしっかり伝えられなくてどうすんだ!」

作品後半の緊迫した場面で放たれるこの台詞。読んだ瞬間、私は主人公と完全に同じ反応をしていた。ハッとした。

言葉は、ただ相手に連絡をしたり、うわべだけのコミュニケーションに使われるものではないはずだ。もっと言葉をうまく使えたら会話をもっと楽しくできるし、もっとお互いを信頼できる関係が築けるだろうなあと思いつつも、私は言葉の「本当の使い方」をよく知らなかった。しかし、この作品を読んだことで私は言葉について二つ学んだ。

一つ目は、言葉の力を信じること。福島が舞台となっているこの作品では、登場人物がそれぞれ震災後の辛い思いや悲しみを抱えており、相手の事情に気軽に踏み込むことができない。だが、抱えている思いを言葉にして共有することで得られるものがある。友情、勇気、立ち直る力、夢。素直に言葉にすることは難しいが、その力を信じ、もう一歩だけ相手に歩み寄ってみることこそが「気遣い」に繋がり、一人で抱え込んでいては見えないものも見えるようになるだろう。

二つ目は、絶望的な状況の中でも声を出してみる。作中には暗く重い空気が流れる場面が数回ある。その際に、決まって誰かが話を始める。話し合いをするとき、周りが黙っていると私はその空気に流されてしまう。自分の意見を自分で押し殺したこともある。そんなとき、この作品の人物のように何か声を発してみるということが必要なのだと思う。冒頭に挙げた台詞には、震災からの形式的な「復興」を超えようとする心のしなやかさや、人との関わりの中で何かを見つけようとするエネルギーが含まれているように感じた。

この作品を読んで学んだことは、言葉について以外にもう一つ。それは、「無知」ということの恐ろしさである。主人公は最初は全くフラダンスに興味も知識も無かったが、男性が踊る古典フラの存在を知り、情熱ある仲間と踊る中でその楽しさに魅了されていく。この「知る」という行為が大切なのだと思う。私は、発電所の事故を起こした側の家族の気持ちや、震災で被害を受けた人と受けなかった人の間での諍いについてなど考えたことがなかった。自分がどれほど無知であり、それがどれほど恐ろしく愚かなことであつたか思い知った。興味が無いから、踏み込みにくい話題だからといって知ろうとせず、進もうとしないのは最も無駄であり、失礼なのだ。知ってみると新しい見方が可能になる。新しい見方ができるようになれば、新しい解決策も生まれるかもしれない。知ることは楽しさであり、言葉の有効な活用法でもある。

作品終盤に酔芙蓉という花が出てくる。朝は純白、夕方には薄紅色になる花だ。この作品は、気を遣って何も話さないまま相手を理解しようとしていた私に、言葉を交わして知ることの大切さという新しい色を加えてくれた。「静」の気遣いから「動」の気遣いへと考えを変えてくれたこの作品のおかげで私も少し鮮やかになれた。この作品と、言葉を交わして私に彩りを与えてくれる両親や友人に始まる全ての人に感謝するとともに、私自身も自分の言葉を信じて、もう一段階踏み出し、知ろうと努力していきたい。



「ライオンのおやつ」 小川 糸 著

## 緩やかな滑り台

電子制御工学科 2年 山口 陽香梨

人生がもうすぐ終わりを迎えることを知ったら、人はどうするのだろうか。なるべく寿命を延ばす？ やり残したことを完遂して満足する？ この物語『ライオンのおやつ』の主人公である海野雫が選んだのは、残りの人生をホスピスで過ごす道だった。

雫が末期の癌を患っていること、余命があと半年もないことを宣告されたのは、まだ三十三歳。それを知った雫は「海が見える場所でじっくり眠りたい」という願いとともに瀬戸内の温暖な島に建つホスピス「ライオンの家」で余生を過ごすことに決めた。病院とはまるで雰囲気の違いが暖かくて優しい空間で、様々な境遇を持つ人々と交わり、幸福な時間を噛み締めながら本当にしたかったことを考える。当たり前のように私たちの前に存在する明日が来ない、というのはどういう感覚なのだろう。その感覚を抱えてどのようにして余生を過ごせば良いのだろうか。それらに興味を持った私は、好奇心と不安感をないまぜにした不思議を抱きながら本のページを捲った。

読了後の感想として第一に思ったのは「ホスピスで過ごした日々は、第二の人生の早送りのようだ」であった。出会い、死別、恋。人生における様々な出来事とその半年間に凝縮されているように感じた。また、読み始めたころは「人生のやり直し」だと思っていたが、読み進めるにつれ「第二の人生」という表現の方がしっくり来るような気がした。この物語では、雫が過去の思い出を振り返るシーンが頻繁に存在する。男手一つで自分を育ててくれた父との思い出、喧嘩別れをしたのが最期だということ、余命宣告をされた日の夜にぬいぐるみに当たり散らしたことなど。これら全ての思い出を上書きするのではなく、今までの思い出を抱えながらライオンの家で新鮮なことでいっぱいな人生を過ごす。第一の人生を歩んできた自分をねぎらいながら残りを新たな気持ちで生きるというのは、まさしく「第二の人生」ではないだろうか。私はここから自己愛を感じた。今まで生きてきた自分を一番憶えていて、頑張ったねと褒めてくれるのは、その思い出を振り返る未来の自分なのかもしれない。ならば私は未来の自分が振り返り甲斐のある濃厚な人生を歩みたいと、そう思った。

特に印象的だったのは、最期が近づいてきた雫のもとに死者が一人ずつ訪れるシーンだ。雫より先に旅立ったアワトリス氏、幼い頃に亡くした母親、心の支えになっていた犬の、亡くなった飼い主などが雫のもとに現れ、話を交わしていつの間にか去っていく。その場面が何の脈絡もなく切り替わる為「ここは雫の知っている生死の狭間のような場所かな」と容易に想像できた。語り手である雫自身も曖昧な意識のまま物語が進んでいく。クライマックスを示唆するような書き方が怖くもあったが、最後の方ではそれにも慣れてきた。恐らく、雫もそういう気分だったのだろう。

この物語では「死」が前提としてその感覚がとても如実に語られている。しかし、ライオンの家の居心地の良さ、もしくは雫自身の感謝の気持ちが物語の多くで述べられているからか、終始穏やかな気持ちで読むことができた。明日が来ない。それは絶望と同義かもしれない。だからこそ、終の住処で自分のやりたいうにのびのびと生きる雫を見て、人生の駒を進めることへの希望を貰えた気がする。原稿用紙二枚では語れないほどの感銘を受け、その全てを伝えきれそうにないのが口惜しい。だから是非この本を読んで雫に関わる人々の「第二の人生」を覗いてみてほしい。

# 図書委員会の仕事について

## ～主食は他人の感想です～ 図書委員会副委員長 電気工学科2年 堀井 雄大

はじめまして。2023年度図書委員会副委員長の堀井です。

私の図書館だよりのお題は「図書委員会の仕事について」だそうですので、今年一年を振り返りながらお話ししようと思います。とは言っても、図書委員会は学生会や高専祭実行委員ほど激務というわけでもありませんので、楽しい出来事が多かったです。



やはり一番印象に残っているのは、前期ブックハンティングで大阪のジュンク堂本店へ蔵書の買い出しにいったことでしょうか。奈良高専の図書委員会には年に2回、ブックハンティングというイベントがあります。クラスごとに図書館に入れてほしい本を応募すれば、応募した本が図書館の蔵書になります。その応募された本を実際に購入しに行くのが我々図書委員会です。

もちろんそれだけでも十分楽しいイベントなのですが、実は図書委員には予算が余ったり、そもそも応募がなかったりした場合、好きな本を予算で購入して蔵書にしてしまえる権限があります。この権限で自分の趣味本を蔵書にして、書架に並んでいる様を見てニヤニヤしたり、布教したりするのが、ブックハンティングの真の楽しみです。

本好きというものは自分の好きな本をよく布教します。これはもちろん面白いものを共有したいという願望の表れでもありますが、実はほかの理由もあります。「感想を食べるため」です。

よくあるたとえで「記憶を消してもう一度読みたい名作」などという例えがありますが、現実ではそんなことはできません。だから我々は他人がその作品を鑑賞して抱いた感想を聞いて食べることで、当時の感動を体験するのです。

そんな本好きの願望をかなえる仕事ももう一つあります。それは「福袋プロジェクト」です。長期休みの時に本を読んでもらうため、図書委員が蔵書で福袋を作って、普段自分で選ばない本を読んでもらうプロジェクトです。布教を正々堂々とできるのでこれも楽しい仕事でした。

このように図書委員会の仕事は楽しみでしかないのですが、もしこれを読んでいる方で、委員会を何にするか考えている方がいらっしやれば、ぜひ図書委員会にお越しください。



## 新蔵書検索サイトの紹介（その1）

昨年3月に図書の有無や排架場所などを検索する蔵書検索サイトがリニューアルされましたのでご紹介いたします。（新蔵書検索サイト <https://libopac-c.kosen-k.go.jp/webopac30/>）



新蔵書検索サイト

# 本の魅力について

## ～私の思う「本」の魅力～

物質化学工学科5年 原 朱眸

みなさんは、「本」になにかしらの思い出があったりしませんか。「本」と言ったら、小説や漫画、図録や絵本などその種類は様々ですね。私は、小さい頃に初めてインフルエンザに罹患し不安だった時、外に出られない私のために母と祖父が買ってきてくれた「小説」がとても面白くて心が少し穏やかになったのを覚えています。

先日、家を整理していた際、その時の本が出てきました。大人になった今、改めて読んでみると、当時とはかなり違った解釈が出来て、年齢と心の状態に寄っても感じ方がやはり違うのだと気付かされました。意外と一度読んで結末を知ってしまったらもう同じものは読まないという人が多いかと思えます。しかし、改めて読み返すと新たな発見があったり、その時の自分の悩みに対する道標になってくれるかもしれません。ある時、本に感情移入して涙することがありました。登場人物に共感するとか、嫌悪するとか賞賛するとか色々ありますが、私の場合、ほぼ2次元に近いほど情景がせまってくるのです。そして、ただひたすらに、その時思いついた事を箇条書きで書き出してみました。後で読み返してみると、それは自分が書いたとは到底思えないような、不思議な感覚を覚えさせたのです。私はこの時、本が、「自分ではない自分の新たな一面」を創り出してくれたのだなという風に感じました。また、これが自分的には本の最大の魅力だとも思います。その後、読書感想文等を述べる機会が多くなりましたが、その時の事を思い出し、自分の心が動いた経験を頼りに述べることに楽しさを覚えるようになりました。

最近では、友人にお勧めの作品を教えてもらったりして、新たな作品を発掘する事を楽しんでいます。また、目当ての漫画の発売日に本屋に出向いたりする際に、必ず店員さんのお勧め小説コーナー等を確認してから帰るのが楽しみの1つでもあります。本を読むことが苦手であったり、中々自由時間が無くて読めない人はいると思います。無理に本を読んで本と向き合う時間を作ればいいのには思いません。ただ、夏休みの課題で課される読書感想文を書く際だけでも、少し真剣に向き合ってみることをお勧めしたいです。

そして、私は、これから自分の人生で1番心に響く本を探し求めたいと思っています。



## 新蔵書検索サイトの紹介 (その2)

著者名や書籍名を入力し検索すると、これまでと同様、排架場所、貸出状況などが表示されます。リニューアル後の新機能としては右図のとおり、図書の表紙画像が表示され、その画像にカーソルを合わせると、さらに大きく表示されますので、とても見やすい検索サイトになりました。





# CPUの創りかた 渡波郁著 情報工学科2年 中野 劉建

「電子工作，始めたいなあ」と電子工作に興味を持っている方、あるいは「CPUを作りたい！」と非常に素晴らしい思いを持つ方に向けて、この本は非常に取っつきやすい入門書になると思います。言ってみれば、CPU自作の冒険の第一歩，登竜門とも言えるでしょう。

CPUは現代科学最高の叡智の結晶であり、その内部構造はますます複雑化、高度化しています。進化する技術に追いつくことが難しく、多くの方がCPUをある種の「ブラックボックス」と見なし、内部の仕組みを理解できないと感じています。そこで、当書がは現代の商用CPUと基本的な機能が変わらない、手軽なCPUを自作するプロセスからスタートし、CPUの仕組みを理解するイチから解説していきます。

初心者でも全く問題ありません。オームの法則や二進数の理解があれば、ゼロからスタートして電子工作に挑戦できます。当書では、抵抗やコンデンサなどのアナログ的な部品から説明が始まり、次第に半導体を使用したデジタルな論理ゲートICから組み合わせ回路・順序回路、そしてCPUの中核をなすALUやデコーダ、レジスタといった複雑なユニットの実装に進んでいきます。最終的にはマシン語に至るまで、一貫した流れで知識を深めることができます。

なぜ情報工学の最も低いレイヤーであるCPUの自作に挑戦するのか。その理由は、「他の分野から見たとき、見方が変わるから」または「楽しい電子工作として、興味のあるものを作るため」です。筆者自身は後者の立場です。CPUはソフトウェアの最前線を支えるほどの究極の汎用性を持っています。自作することで、ソフトウェアの視点から見た際に物理的なレベルでの処理がど



のように行われているかを理解でき、システムに対する解像度が飛躍的に向上します。その後、次のレイヤーに進んでいくことで、OSやコンパイラといった基本ソフトウェアに対する理解が深まります。この本は、情報工学の高い敷居を乗り越える一步を踏み出すための貴重な指南書と言えると思います。

## 新蔵書検索サイトの紹介（その3）

スマホでの利用は10ページのQRコードから、パソコンでの利用は「奈良高専図書館」ホームページ左下の「図書館蔵書検索（OPAC）」バナーからアクセスしてください。





# 江戸川乱歩傑作選

江戸川乱歩著

情報工学科1年 三原 瑚桜

江戸川乱歩は大正から昭和にかけて活躍した小説家だ。1923年に短編『二銭銅貨』でデビューして以来、推理小説や恐怖小説を世に送り出してきた。没後60年近くたった今でもその知名度や人気は高く、乱歩や乱歩の著作を基にした作品も多く書かれている。ところで昔の文豪などが書いた小説は堅苦しい、難しいというイメージが多いのではないだろうか。私も実際そう考えていた人間で、乱歩にチャレンジすると決めたのは高専に入学してからだった。自分に合わなくてもしょうがないと思いながら読み進めていたが、予想に反して驚くほど読みやすく、ワクワクする小説だった。だから、もし年代を理由に乱歩を遠ざけていた人がいればそんな心配は全くいらないと伝えたい。むしろ100年後を生きる私たちだからこそ楽しめる部分があるように感じる。

この本には九つの短編が収録されている。いずれも初期の乱歩を代表する傑作だ。例えば前述の『二銭銅貨』や名探偵・明智小五郎が登場する『D坂の殺人事件』。この二つは本格的な推理小説で、登場人物たちの推理合戦や、あっと驚く真相が読者を夢中にさせる。特に二銭銅貨の冒頭の「あの泥棒が羨ましい」という書き出し。ここでもう心を奪われる。これから起こるであろうロマン溢れる事件を想像するとドキドキしてしょうがない。また扱われる題材も豊富だ。ミステリーで言えば暗号、密室、倒叙もの（犯人視点で語るミステリー）があるし、ホラー系も不気味なものから美しいものまでいろいろ揃っている。そのため読んでいて飽きがこない。

面白いのはストーリーだけではない。乱歩の作品には、世間には到底受け入れられない楽しみに目覚めてしまった者たちがよく出てくる。その者たちの描写が圧倒的なのだ。普通の範疇に収まる人間だったのが、じわりじわりと異常性を増していき、取り憑かれたようになってしまう。その過程を本人の言動や思考でねちねちと追っていくのがとても怖い。怖いのに、しかし、彼らを否定しきれない。変態的なのに共感できてしまうし、狂気に満ちているのに美しいから、ページを捲る手を止められない。

その時代だからこそ映えるトリック。逆に今も昔も変わらない人間性。乱歩の作品は時を超えて私たちに様々な感動をもたらす。謎を楽しむもよし。恐怖を味わいにいくのもよし。文章力に溺れるもよし。九編の中の一つでもいい。興味があればぜひ読んでみてほしい。



## 編集後記

図書館だより第81号に執筆いただいた皆様、ご寄稿ありがとうございました。昨年5月、新型コロナウイルス感染症の位置づけが5類感染症に移行し、図書館も概ねコロナ以前の状態に戻っております。コロナ禍で遠ざかっていた皆様、ぜひとも再び足を運んでいただき、知的好奇心を満たしてはいかがでしょうか。  
(図書館)



奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町22

TEL 0743-55-6015

URL <https://www.nara-k.ac.jp/nnect-library/>



奈良高専図書館